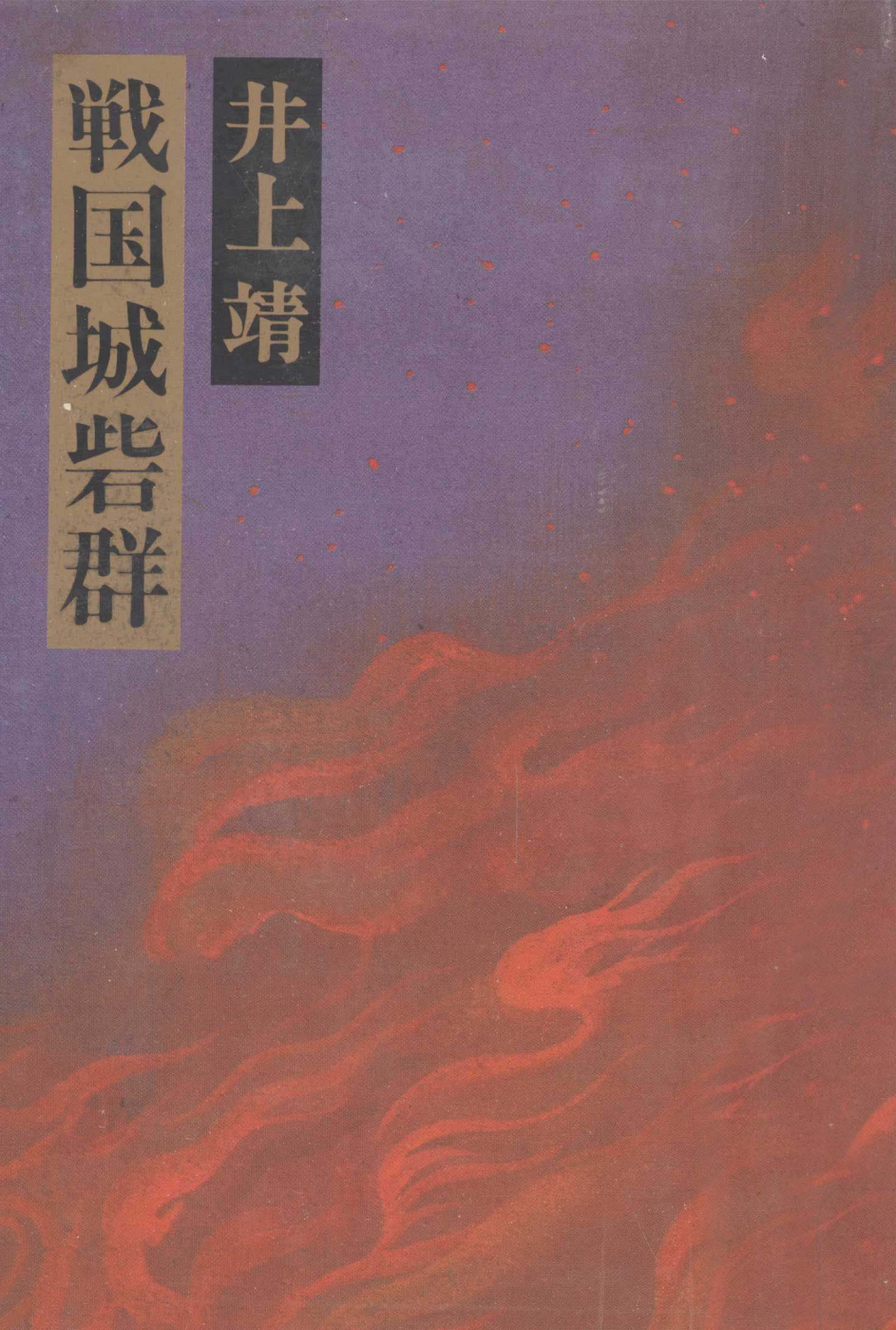


井上靖

戦国城砦群



上靖

国城砦群

文藝春秋

© Yasushi Inoue. 1977

戦国城砦群

昭和五十二年三月二十五日 第一刷

著 者 井 上 靖

発 行 者 檜 原 雅 春

発 行 所 株式文 藝 春 秋

郵便番号 (102)

東京都千代田区紀尾井町三
電話 (〇三) 二六五一 二二一

本文印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落し字丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《長篇小説》

戦国城砦群

内容目次

出陣

171

火

145

雷雨

126

甲斐信濃

111

陽と波と

80

早春

52

広野

30

落武者

7

解説

福田宏年

257

夏の陽

232

居合抜き

227

敗戦

218

朝焼け

201

再会

191

戦国城砦群

装
幀

平山郁夫

落武者

十数人の武士たちが、一列になって、山の背を歩いている。半間ぐらゐの間隔をあけて、誰も一言も喋らず歩いている。信濃から甲斐へ抜ける間道である。

春の短い陽が、ずっと西に傾き、十幾つの影法師が、長く、東側の斜面にのびている。

先頭の一人が立ち止まって、路傍に腰を降ろすと、あとに統っている十幾人も、どっとその場に腰を降ろす。明らかに落武者である。一様に髪はさんばらで、鎧も満足なものはない。三人が槍を持っているが、申し合せ

たように、穂先が飛んでいる。

「大体、俺は、今年の正月の元日の雲を見た時、嫌な年だと思つたな。暁方の雲に、あんなうろこみtainな青黒い奴はあるものではない」

この一行の中では一番の年嵩らしい髯だらけの中年の武士が言つた。

誰も聞いているのか、いないのか、その武士の方は見向きもしない。

「この天正十年という年は、まだまだ嫌なことがあると思うんだ。よほど運がいい奴でないと、めつたに生命は完うせまいて」

それから、何が可笑しいのか、その武士は両手を背後について、上半身を大きく波打たせながら笑つた。

「何が可笑しいんだ、貴公」

その隣に、だらしなくのびて、地面に腹這っている三十ぐらゐの、顔の長い武士が、髯の方へ顔を上げた。

「なにが可笑しい？ おぬしは可笑しくないのか。法性院（信玄）様の時は、甲斐、信濃は勿論北は越後、南は

三河、遠江までの御領地だった。それが僅か十年ばかりの間に、だんだん小さくなって、とうとう城が一つになつてしまった。これが、一体、可笑しくなくていられるか！」

喋っているうちに、昂奮がこの髯の武士を襲つたらしく、彼はいきなり、突っ立ち上がると、

「貴様らは、これからどこへ行つて、何をするか知っているか」

と、呶鳴った。

誰も返事をしなかった。

「揃いも揃って間拔けな奴らだ。城が落ちて、落武者になると、顔つきまで変つて来やあがる。いいか、これから武田家と一緒に、身を亡ぼすために道を急いでいるのだぞ。最後の城の落城に間に合わなくては大変だ！ さあ、歩き出せ」

髯の武士は言つた。

「亡びると決つたものでもあるまい」

遠くの方で誰かが言つた。

「とんでもない甘い考え方を持つていやあがる！ そんな考えを持つている奴は、ここで、とつとと失せろ！ 俺と一緒にいくと、死ぬんだぞ、いいか、生命はないんだぞ」

髯武者は呶鳴った。

一団の落武者たちは、相変らず一列になつて、尾根伝いに甲斐と信濃の国境いの山を歩いてゐた。夜になつてゐた。

髯武者が、いつか、何となく、この一団の武士たちの統率者といった恰好になり、彼が、

「休め」

と言うと、一同は、その場に崩れるように坐つた。

「おい、歩くぞ」

と言うと、みんな歩き出した。

月は見えなかったが、春の宵らしい薄明りが、あたりに立てこめてゐた。

農家の灯が谷底や、山の斜面のどこかに見えると、髯武者は順番に三人ずつ選んで、

「お前ら、行って飯を詰めこんで来い。そして帰りに握り飯を一つ持って来い」

と言った。

三人について、他の者が同行しようとなると、

「お前らは、この次だ。この次に農家の灯が見つかったら、行かせてやる。それまでは我慢しろ」

と呶鳴った。髯の武士の処置は、頗る当を得たものと言えた。一軒の農家へ多勢で押しかけても、多勢の空腹を満たすだけの食糧があらうとは思われなかった。

三人が帰って来るまで、他の連中は地面に腰を降ろしていた。

三人が戻って来ると、一同はまた歩き出した。髯の武士は、彼等が土産に持って来た握り飯を自分だけ頬張り、黙々と先頭に立って歩いた。

こんなことが何回か繰り返された。歩き疲れて、一同が、熊笹の原に眠ったのは、夜半である。

それまであたりに漂っていた薄明は、いつか漆黒の闇に交っていた。

十幾つかの寝息が、闇の底の、熊笹の原のあちこちから起っていた。

朝起きてみると、人数が半分になっていた。

「飯を食った奴等ばかりが逃げやがって！」

いまいまいそうに、髯の武士は言った。実際に残っているのは、昨日一日食糧にありつかなかった連中ばかりである。

落武者の一団と言っても、一つの城からの落武者ではない。

破竹の勢いで進撃している織田軍に打ち破られた信州各地の武田の城砦から逃れ出して、いつかひと塊まりになった連中である。

どこへ行くという当てもない。甲斐へはいったら、まだどうにかなるかも知れない。とにかく甲斐へ行ってみよう。そんな気持で、甲斐の方へ足を向けている連中である。

併し、武田の廃亡は誰の眼にも明らかだった。甲斐へ行くということは、髯武者の言葉のように、死に行く

ことであるかも知れなかった。

三日目の朝、釜無川の上流の磧^{がれ}で、髯武者は眼を覚ました。眼を覚ますと、彼はがばとはね起きた。

昨夜ここに横たわった時は、まだ七人の武士たちが一緒だったが、今は誰もいなかった。

や！ みんな逃げたか！

髯武者は、大きい眼をむくと、

「虫けらめ！」

と、低く呟いた。

が、その時、彼は聞き耳を立てた。川瀬の音にまじって、どこからか、いびきらしいものが聞えていたからである。

髯武者は立ち上がると、あたりを見回した。大きい石が、流れの岸に、五つ六つ、ごろごろしていたが、その間に挟まって、一人の若い武士が正体なく眠りこけている。

一人だけ、残っていやあがる！

髯武者は上から、じろじろと、その寝姿を見守っていたが、そこへ近づいて行くと、

「おい、起きろ」

と呶鳴った。

「うーむ」

若い武士は顔だけを上げたが、

「もう少し寝させてくれ」

と言った。

「贅沢を言うな。今日中に、新府の城へはいらなければならぬ。歩き出すぞ」

その言葉で、若い武士は、大きい欠伸を二つして、磧の上に起き上がると、顔を洗いに流れの方へ歩いて行った。

年の頃は二十七八であろうか。ちょっと惚れ惚れするような、見事な軀をしていた。髯武者は、この若い武士と三日間一緒だったが、今まで一度も口を交さなかった。と思った。

流れの水で汚れを落した武士は、今初めてそれと知っ

たが、きりっと緊まった彫りの深い顔をしている。相当合戦の場数を踏んでいると見えて、額と頬に刀傷があり、右手の甲も一本、縦に割られている。

額の傷は古く、頬の傷は新しい。

「おぬし一人になったな。逃げるなら今のうちだぞ」

髯武者は、若い武士の眼を見入るようになって言った。

若い武士は、それには答えないで、

「飯はないか」

と言った。

「そんなものあるものか。もう少し行けば部落があるだろう」

「よし、仕方がない、そこまで歩くか」

二人は歩きにくい磧の上を歩き出した。

「死なすのには惜しい喆、まだ若いのに！」

髯武者が言った。すると、

「俺は死にはせん。死ぬなんてまっぴらだ」

若い武士は振り返って言った。

「死ぬのがまっぴらだ？」

髯武者は立ちどまって、若い武士の顔を見詰めた。

「死ぬのが嫌だと言っても、新府へ行けば死ななければならぬ。織田信忠の大軍を三日とは支え得まい」

「そんなことは判っている」

若い武士は言った。

「とすると、おぬしは新府の城へ行くつもりではないな。甲斐へはいったら、どこかへ逃げるつもりだな。さしずめ郷里が甲斐だというわけか！」

「郷里は伊那だ。飯田の城から落ちて来たのだ。逃げるつもりなら、とうに伊那で逃げていて。わざわざこんな方へ逃げて来るか！」

「ふむ、では、確と新府の城へはいるか！」

「いかにも」

「新府の城へはいったからには、生命はないぞ。助かるなどと思ったら大間違いだ」

「では、貴公は死に行くのか」

「勿論」

「死ぬために、昼夜兼行で道を急いでいるのか」

「武田が亡びる時は、俺の生命も一緒に亡びる時だ。それが武士の道というものだ」

「武士の道か？」

若い武士は、真面目な顔でちょっと考える風にしていて、
たが、

「俺も曾ては、そう考えたことがある。——併し、俺はごめんだ！」

「では、なんで、新府の城へ行く？」

「それは言えぬ。少し差し障りがある」

若い武士の言い方は不遜だった。それが髯武者を刺激したらしかった。

「言えぬ？ 何のために新府へ行くか判らぬ奴と、俺は同行することはできぬ」

「そうむきになるな。どうせ、新府へ行ったら、三日とは生きていない貴公ではないか」

それから、二人は、暫く黙々と歩いて行った。磧から崖道が上がると、丘陵の中腹を走っている道へ出た。

杉木立が道の山側の方を埋めている。

そこまで来た時、髯武者は急に立ちどまると、

「もう一度訊く。武田に殉ずる気はないな？」

「ない！」

「ほかの奴らのように、こつそりと逃げるのなら兎も角、堂々と不埒なことを公言する奴は生かしておけぬ。藤堂兵太の刀の錆にしてくれる！」

彼は二歩後へ退がった。そして、刀の柄へ手をかけたまま、若い武士の方を窺った。

「いい年齢をして短気な奴だな！ 貴様みたいな奴ばかりいたので、武田はこんなことになったのだ！」

髯武者の方に視線を当てていたが、やがて若い武士も背後へ二三歩退がった。春の午前の陽が、木の間から洩れて、二人の間の路面に縞を作っている。

藤堂兵太と名乗る髯武者は、一本の杉木立を背にして、

「来い！」

と言う声と一緒に抜刀した。それから、若い武士を見守ったまま、

「斬る前に、名前だけ聞き届けてやる、名を名乗れ！」と叫んだ。

「どうせ、三四日中に死ぬ奴を斬る気はない、俺はやめる」

若い武士は言った。

「ぬかすな、名を名乗れ！」

「貴様に名乗るような名は持たぬ」

「うぬ」

余り敏捷には見えなかった兵太の躰が、その時、ほんの少し揺れたかと思うと、刀が電光のような素早さで横に払われていた。

若い武士は半間程跳びのくと同時に、彼もまた刀を抜いた。

「無益な殺生だが、よし、斬ってやる！」

若い武士は言った。それから刀を構えたまま、じりじりと兵太の方へ詰めて行った。

「使えるな、若僧！」

兵太は言った。言ってから一歩退がった。若い武士は、

相変らずそのまま、じりじり詰めて行った。

怖れを知らぬ奴だな！

この時、兵太は思った。

退がるということを知らぬ奴だな！

また兵太は思った。

斬るか斬られるかの実戦だけで叩き上げた腕である。

抜刀したが最後、自分の生命のことなんか、てんで念頭がない棄て身の剣法である。

斬る！ 斬る！ 斬る！ 相手を斬るの一点張りの殺

気が、若い武士の眼にも、切っ先にも、凝り固まっている。

兵太は、自分から刀を抜いたことに、この時、軽い悔いを感じた。どちらが勝つか判らないが、いずれにしても、互いに無傷では相手を斬れないと思ったからだ。

併し、そうした兵太の思いもすぐどこかへ飛んだ。

斬るか斬られるかの死闘が、片方は崖、片方は杉木立の細い山道に展開された。

兵太は、若い武士に、一太刀浴せるために追いに追って行った。そして間もなく逆に山の斜面を追われを追わ

れた。

「や！」

「とう！」

いつか、兵太は山の斜面の上手に、若い武士は下手に、
対い合^{あひ}つて立っていた。

時々、二人の口から出る掛け声のほかは、釜無川の川
瀬の音が、あたりを埋めている許りである。

そうしている時、兵太は、はっとした。

法螺の音がどこからか聞えて来たからである。若い武
士もはっとしたらしく、構えたまま、足場の悪い斜面を、
ずるずると半間程滑るように退がった。

兵太は、その隙に、視線を杉木立を通して、麓の道の
方へ投げた。

何十人か、何百人か判らぬが、武士の長い隊列が、釜
無川の磧を、流れに沿って下手へと行進していた。そし
てその隊列から離れたらしい十数人の武士たちが、いず
れも前屈みの姿勢で、斜面をこちらに登って来つつある
のが見えた。

これは不可^{いか}ん、と兵太は思った。

隊伍整然として、しかしいずれも銃を背にしている
ところから見て、到底武田方の部隊とは思われなかった。

「おい、織田だ！ 逃げろ」

と、思わず、兵太は自分と斬り結んでいた相手に呶鳴
った。

若い武士は、それには答えず、暫くその場に突っ立っ
ていたが、

「織田？ 本当か」

半信半疑で言った。

その時、突然、銃声が上がった。

兵太は、がばと、その場に身を伏せて、銃声があたり
にこだまするのを聞いていた。硝煙の匂いが、微かにど
こから流れて来た。近くから狙撃されたらしい。

そっと兵太は顔だけ起した。若い武士が、がむしやら
に向うの斜面の繁みの中を攀じ登って行くのが見えた。

そしてその若い武士を追うようにして、十数人の武士
たちが、やはり同じ斜面を攀じ登って行く。